

倭人伝の語源を探る

神尾忠和

一 対馬国の語源は藻の事です

対馬は、津島の意に捉えておられる方が多いと思いますが、そうではありません。地名を決めるには、その地に何かしらの特徴があり、それを聴くことで、また、見たりするだけで、その場所が特定されるという必要があるのです。

対馬の特徴とは何だったのでしょうか。それは藻だったのです。

対馬島の南端に巖原市浅藻という地名があります。この地は湾になっており、北風を防いで、舟を停留するには絶好の場所だったのでしょうか。一大国に行くにも、戻ってくるにも、この浅藻の湾が重要だったのです。航海人の安全を確保してくれるこの浅藻は、この島を代表する名称となったのです。

藻のことを韓国語でマルワム (marwam) と発音しますが、もとはマルバム (malbam) でした。この発音を吏読 (りとう) で対馬と表現したのです。(吏読とは、朝鮮で漢字の音訓を借りて、朝鮮語を記すのに用いた表記法。漢字を朝鮮語の語順に並べ、助詞・語尾などの文法的部分と一部の名詞をこれで記したものです。)

高句麗では三宰相を置いてシンカ・マルチ・プルチと名付けて、吏読で相加・対盧・沛者と書いていました。対馬はマルバムと発音する事が出来るのです。意味は藻です。

二 一大国の語源は初山の事です

一大国は、一支国と書くのを書き損じたものと捉えておられる方が多いようですが、そうではありません。

一は、中国語でイチ・チツと発音します。韓国語ではイル・ハナと発音し、日本語ではヒ・ヒトと発音します。

一は、初日とか試合開始などといった時には、初も始も一を意味していることとなります。始は韓国語でピロツ (pilot) ですから、語根はピル (pir) で祖語形はピツ (pit) となります。ピツに接尾辞のオ (o) が付いてピト (pito) となり、音韻の相互互換的使用でヒト (hitto) となります。

日本語のヒトツ (hitotu) とハジメ (hazime) の語根ハツ (hat) は、音韻の変化でパツ (pat) となります。韓国語の初と日本語の一の語は同源語となりますので、一大国の一は初です。

大は達と同系の語です。達は高句麗語ではデ（d e）と発音します。阿斯達はアスデ（a s u d e）と発音し松山という意味になります。大は、ダイ（d a i）の母音のaとiが重なっていますので、デ（d e）の発音に変化します。韓国語では、達はタル（t a l）と発音し山という意味です。一大国の大は山の意味です。

一大国とは、壱岐島の南端にある山の名前である初山が語源なのです。初山の峰から稜線が三方向に伸びているのが分かります。尾根が分岐しています。岐の文字は、山＋支ですから、初山は初岐であり一岐であります。一岐は壱岐と書くことが出来ます。一支はイキとは発音しませんが一岐と同系の文字と言えるのです。

同じ一大でも一大率の一大は意味が異なります。韓国語では、数字の一はイル（i l）と発音します。これと同じ発音の語で、意味が「もろもろの仕事・職業、用事・用件、事情、事業・計画、事故・事変、命令」というのがあるので。また、イルハダ（i l h a d a）という語は「働く・仕事をする」という意味なのです。ハダは接尾辞です。率の意味は「ひきいる。はみ出さないように、まとめて引き締める。ルートからそれないようにする」ですから、一大率とは「諸々の仕事をまとめて引き締めて、行動・進退を指図する役人」という意味であることが分かるのです。

三 末羅国の語源は末世の事です

末羅国の記録で特徴的なのは、潜水漁法の記述です。その特殊技能は中国にまで知られていたのでしょうか。倭国大乱の始まる約四十年前に「倭の国王帥升等、生口百六十人を献じ、請見を願う」とあります。

韓国語で帥はス（s u ・ s h u）と発音します。升は、韓国の地名に升於谷とあり、これをサオシル（s a o s i r u）と読んでいますので、帥升はスサ（s u s a）と発音することになります。等は韓国語でカッタ（k a t t a）と発音します。タ（t a）は接尾辞ですが、語頭のカッ（k a t）は韓国語で王を指す言葉です。

スサは、日本語で「すさむ・すさぶ」と言います。日本神話で、須佐之男命として用いられています。帥升等とは「湧いてくる勢いの赴くままになる王。はなはだしくなる王。荒れて細やかさが無くなる王」という意味になるのです。

請見は成功したのでしょうか。「倭人は潜水漁法の特殊技能を有している」と中国全土に知られることになったと思われまます。

倭国大乱の終わりごろに、鮮卑族の檀石槐が部落民に推されて大人となり、やがて大鮮卑国の国王となり活躍します。その活躍の途中で烏侯秦水を見つけ

るのです。

『後漢書』鮮卑伝には「烏侯秦水を見たところ、流れが停滞したところに魚がいたが捕えるすべを知らなかった。檀石槐は汗人が魚を捕らえるのが上手だと聞いたので、東方に進出し、汗人国を襲って千余家を得、これを烏侯秦水のほとりに移り住ませ、魚を捕らせて食料を補助させた」とあります。

汗人の汗は「あせ」のことです。韓国語で汗をタム（t t a m）と発音します。これと同じ発音の漢字に耽があります。昔は濟州島を耽羅国と言っていました。耽の意味は「ふける。深く入り込む。おぼれる」です。

『魏志』韓伝に「州胡という国がある。この国は、馬韓の西海に浮かぶ大島の上にある。住民の背丈はやや低く、言語も馬韓のそれとは同じではない。人々はみな頭をそっているので鮮卑のようである。・・・船に乗って往来し、中韓において市買する。」とあります。

檀石槐は、鮮卑族に推されて王になっているのです。それと同族と思われる汗人が耽羅国人なのです。その汗人（耽羅国人）は船を所有していて、中国・韓国を相手に商売をしている。商品は何でもいいのです。情報も人間も商品として市買出来るのです。潜水漁法の特殊技能者を、唐津湾岸から拉致して、檀石槐に売り渡したのが汗人であり、被害者は倭人です。汗人は倭人を監視する為に烏侯秦水に留まったのです。

倭国大乱の時代ですから、隣の集落の人も敵かも知れないのです。水稻栽培が倭国に伝えられた地であるのに「草木茂盛し、行くに前人を見ず」と言うように田畑は手入れがされずに荒れ放題で、生口や拉致で人口が激減しているので人影を見ることもない、という程に唐津湾岸の住民はいなくなったのです。末羅国には官も副官もないのです。弥生中期以降は首長の墳墓などの遺跡は造られていません。

末とは「物事の大切なでない部分。ある期間の最後の時期。衰えた時代」と言う意味ですから、末羅国は一時期消滅したのです。倭人伝の本文に「今倭の水人、好んで沈没して魚蛤を捕らえ、分身し亦以って大魚・水禽を厭う。・・・」とあります。その直前には「古より以来、其の使い中国に詣でるや、皆自ら大夫と称す。・・・」とあります。古より唐津湾岸に住んでいた潜水漁法の特殊技能を有した倭の水人が消滅したので、新たに越・呉・淮などの水人が渡り来て住み着いたと記録してあるのです。その数が「四千余戸有り」なのです。

『漢書』列伝に、地名と距離を記した図面があります。その図面は劉昭が注記入れたもので、洛陽を基準点として方位と距離が記してあります。それには「洛陽から北へ千五百里で雁門。洛陽から西へ九百五十里で長安。洛陽から東へ千五百里で琅邪。」などとあります。檀石槐は、洛陽から東へ千五百里で琅邪へ行き、さらに東へ海行すれば汗人国（耽羅国）や、潜水漁法の倭人が居るこ

とを知っていたのです。

四 伊都国の語源は橋頭堡の事です

伊都の伊には「万事を調和する人物を示す」という意味があります。都には「あつめる。あつまる。統べる。多くのものを一つに集める。また、あつめて統率する。その役目」という意味があります。

「統べる」の意味に「いとぐち」と云うのがあります。この「いとぐち」のことを端緒と言います。韓国語で「端緒」のことをシールマリ (s i l m a r i) と発音します。s i l の (l) 音は子音ですので脱落しやすく、また、m a r i の (r i) 音も脱落しやすいので日本人の耳に入って来る音は s i m a と聞こえるのです。この発音が「志摩」という地名として糸島半島の西岸に残っているのです。

シールマリの意味は「事の始まり。糸口。手掛かり」です。シールは「糸」のことでマリは「頭」の事ですから、統べるための拠点として物事の最先端（頭）に、手掛かり（糸）や足場を確保する必要があります。それが志摩だったのです。この拠点を「橋頭堡」と言います。橋頭堡とは「渡河・上陸作戦の祭、その地点を確保し、後続部隊の作戦の地歩を得るための拠点」であります。大陸や朝鮮半島から多くの人達が倭国に上陸して乱が起こったのです。

伊都国の拠点と思われるのが前原です。前原の「前」は、韓国語でアプ (a p) と発音します。意味は「前・前方・将来・前途・以前・取り分・分け前」です。前原の「原」は韓国語でバル (b a l) ・プル (p u l) と発音します。意味は「原・国」ですので、前原とは「統べる人の取り分の国土・分け前の国土」と言うことになります。橋頭堡を確保した志摩（斯馬国）や、終わりを迎えた末羅国などの室見川以西の地域を取り分として伊都国をたてたのです。

斯馬国や末羅国には、官の卑狗や卑奴母離がいません。伊都国について「世々有王、皆統属女王国」とあります。世々とは「代々祖先から親が子に引き継ぐまでの期間。同一の氏族が引き続いて国家の主権を持つ期間」と言う意味です。一代が約三十年ですから、十代続けば三百年となります。統の意味は「治める。全体を一筋に纏める。」です。卑狗や卑奴母離が居る国居ない国に関係なく、皆を一筋に纏めたのです。属の意味は「くつつく。付き従う。その範囲に入っている。つづく。仲間に入っている。」ですから、伊都国王は「皆を一筋に纏めて、女王国にくつつき、その範囲に入っている。」と言っているのです。

五 倭人の語源は外人（部外者）の事です。

倭の意味は「背丈の低い人」と「外人」の二つがあります。倭と同じ意味の「背丈の低い人」の語は「矮」と「倭夷」です。これは二つともワイ (w a i) と発音します。母音のアとイが繋がるとエ音になりますのでウエ (w e) と発音することになります。この発音は韓国語で「倭」の事を言っているのです。

新羅の郷歌である「彗星歌」には、倭軍を「倭理叱軍」と表記してあります。これはオリクン (o r i t k u n) と読みます。「倭理」オリ (o r i) が倭のことで、「叱」が (t) です。この (t) は、「倭理」と「軍」との複合名詞の中間に介入しており連体助詞に値します。オリ (o r i) の (r) 音が脱落してオイ (o i) となります。韓国語では、オ (o) とイ (i) の発音は特殊な発音でウエ (w e) と言います。この発音は、韓国語での「外」と同じなのです。このことから、韓国語でウエ (w e) と発音する語に「倭」と「外」の二つあることが分かるのです。

倭人とは外人と言っていることにはなりますが、日本語で言っている「日本の国籍を持っていない人」という意味ではありません。韓国では「部外者・仲間以外の人・疎遠な人・敵視すべき人・外側の人」という意味なのです。

『三国史記』の新羅本紀には、「倭人、兵を行 (つら) ねて、辺を犯さんと欲す。」とあり、また、「倭人、兵船百余艘を遣わし、海辺の民戸を掠める。」とか「倭人、大いに飢える。来たりて食を求める者千余人なり。」とあります。このある倭人とは、九州北部や壱岐・対馬方面に居住する人々の事ではなく、韓国内に居住する韓国人で、何かしら問題のある人たちだと思ふのです。例えば、罪を犯して逃亡している人、税金を納められずに逃げ出した人、天候不順で農作物や漁労の収穫が無かった人などです。

倭人が「外側の人」であれば「内側の人」とはどのような人でしょう。それは『三国志』魏書東夷伝の冒頭に記録してあります。「(東方の地域については) 公孫淵が父祖三代にわたって遼東の地を領有したため、天子はそのあたりを絶域 (中国と直接関係を持たぬ地域) とみなし、海のかなたのこととして放置され、その結果、東夷との接触は断たれ、中国の地へ使者のやってくることも不可能となった。」とあります。このことから、内側の人とは「中国の支配下に入っている国の人」でありますから、外側の人 (倭人) とは「海のかなたの絶域の人」ということになるのです。

倭理はオリ (o r i) と発音します。このオリは韓国語で「瓜」を意味する語と同音なのです。日本にはオリと言っている頃に伝わったと言われており『満鮮植字彙』には「o i は u i に転訛する」とありますので、日本語ではウリ (u r i) となって固定したことになります。u r i の (r) 音が脱落して u i となります。これを韓国語ではウイ (w i) と発音するのです。この発音は韓国語で「委」と同音なのです。一七八二年に福岡・志賀島で発見された金印に「漢

委奴国王」と彫られていました。ウイ(委)はウリ(ur i)が変化したもので、これはオリ(or i)が音韻変化した語です。オリは倭理叱軍(or i t k u n)のオリですから倭の事になります。このことから委も倭も同じ意味である事が分かるのです。委には「すえ。曲がりくねった末端。はし」という意味があります。倭は「外。外側」の意味ですから、委奴も倭奴も「中国の支配が及ぶ範囲の末端・外側」という意味になるのです。

「倭」と「外」は韓国語でウエ(w e)と発音しますが、「外」には他にパカッ(p a k k a t)という発音もあるのです。意味は「外・外側・表」です。『通典』に「倭面土国」とあります。倭は「外」の事ですから「外面土国」・「表面土国」と同じことになります。韓国語で「外面」をウエーミョン(w e m y o n)と言います。この語の意味は「がいめん・外側の表面・そとづら・外からの見掛け、顔をそむけること・そっぽを向いて相手にしないこと」です。前述のように、公孫淵一族が遼東の地を領有していたために、倭国は海の彼方の事として放置されていたのです。そのことを「外面土国・表面土国・倭面土国」と表現してあるのです。

金印の「委奴国」の奴や、『通典』の「倭面土国」の土は、漢音で「ド」と発音していますが、奴は韓国語でノ(n o)・ナ(n a)・ラ(r a)と発音して「渡し場・川・沼・集落・京・国」の意味なのです。これらのことから、委奴国や倭奴国、そして倭面土国の意味は、中国から見て「海の彼方の絶域・外側・末端にある集落の国」となるのです。

六 卑弥弓呼とは善射者の事です

狗奴国の官に「狗古智卑狗」とあります。古智はコチ・クチと発音します。『韓国古地名の謎』(光岡雅彦著)によりますと、「村」を表現する用語として、骨(コチ)・只(クチ)・惣次(コチ)・古次(クチ)・串(コチ)などの語があると指摘されています。韓国で「骨」と云うと骨品制度が思い出されます。骨は「血統や家系」を意味しています。骨品とは「出身氏族や血統の正当さをもって品位に代える」というものです。王族に属する者が最上位で「真骨」と呼ばれていました。

王族が居住する村に、コチ・クチと発音する地名があると言うことは、そこが「宗主の居所」であり「城」を意味している。と同氏は述べておられます。その頃の高級官僚や諸官庁の長官は「真骨」が占めていたと言われているので、「狗」は「宗主・王」の意味となります。狗古智卑狗の「古智」は「城」の意味ですから、狗古智とは「王城」と言っている事が分かるのです。

狗奴国の奴の意味を調べてみました。倭人伝には彌奴国・姐奴国・蘇奴国な

どの国名に奴の文字が含まれていますが、『魏志』韓伝の馬韓・弁辰韓に記録されている国名には奴を用いてないのです。『三国史記』の地名に「黒壤一云今勿奴」とあります。これは「コムルラ」と読みます。「コムル」の意味が「黒」で、音が今勿（クムムル）です。壤と奴は、いずれも「ラ」の音を表現した文字なのです。また、人名に「素那一云金川」とあります。これは「ソエ（鉄）」の「ナ（小川）」ですから、意味は「金川」で音は「素那（ソナ）」なのです。

奈良は「ナラ」と発音します。朝鮮半島からの渡来人によってもたらされた言葉で、本来の発音は「ララ」です。「ララ」の意味は「渡し場」を指す名詞でした。渡し場が設けられる所は流れが緩やかな場所であり、湾曲している所でした。その様な所は沼や藪があり、漁獵や狩りの場であり、人が多く集まり易いのです。

小さな集落が、やがて大きな村となり、首領が治める京・国家を指す名詞になったものです。ララは音の変化でナラとなり、やがて「ナ」だけで、「ラ」だけで「川・原・村・京・国」を意味するようになったのです。韓国の古地名の末尾についた那・羅・奴・浪・婁・壤・岡・陽・牙・邪などは「ラ」の音訳であり、川・原・村・京・国などは「ラ」の意識であると言えるのです。

狗奴国の狗の意味は、狗古智卑狗の所で述べましたように「宗主・王」のことです。『三国史記』地理志に「王逢県一云皆伯」とあります。皆伯は「カマ」と読みます。高句麗では王や貴族を称する名詞です。王逢の「逢」は「マッ」と発音しますので王逢は「カマ」と読みます。「カ」「マ」は同義語であり「貴い・神聖な・神」などの意味に使われています。

狗奴国は「カラ国」と発音し、「王国」と言う意味になります。「カラ」は加羅・籠洛・加那・狗邪・伽那・狗盧・官国とも書かれていました。

狗奴国の男王は卑弥弓呼とあります。卑弥は漢音でヒミと発音します。同じ発音で韓国語にヒミハダという語があります。漢字で表現すると「稀微」で、ハダは接尾辞です。稀微には「ぼんやりしている・はっきりしない・ほの暗い・かすかに聞こえる」と言う意味があります。『老子』には「之を視れども見えず、名づけて夷という。之を聴けども聞こえず、名づけて希という。之を捕ふれども得ず、名づけて微という。」とあります。また、続いて「是を無状の状、無物の象と謂う。是を恍惚と謂う。是を迎ふれども其の首を見ず、是に随えども其の後を見ず。古の道を執り、以って今の有を御す。能く古の始を知る。是を道紀と謂う」とあります。

卑弥弓呼の呼は、韓国語でホ（h o）と発音し「豪」と同音なのです。豪には「強い。荒々しくて勇ましい。また、そのような人。すぐれる。能力や才知などが人よりまさっている。また、そのような人。おさ。かしら。率いる人。長。その道の達人。財産や勢力のある人」と言う意味がありますので、卑弥弓

呼とは「稀微弓達人」という意味の語を音訳したものと言えるのです。漢人の商人が朝鮮半島の南端まで来て「海の向こうに何がある」と質問した時に、韓国人商人や漁民が「海の彼方の絶域に島あり山あり人が居ることは知っているが疎遠である」と言い、「はっきりしないが、勢いが強く盛んな女王がいる。これまたはっきりしないが弓の達人と言われている男王が居る。」旨の返事をしたものと思われます。

弓の達人と言えば朱蒙伝説が思い起こされます。ツングース系民族が立てた扶余国の王河伯の女が、日神に感じて身籠り生まれた子が朱蒙と言われています。朱蒙は成長すると同輩たちの中で力の強さが他に抜きんでており、特に弓を射ることの巧みさは並ぶものが居なかったのも、名前を「鄒牟」と付けたと『三国史記』高句麗本紀東明聖王条にあります。『三国志・魏書・高句麗伝』には鄒牟（チュム）を朱蒙（チュムル）と記し、朱蒙は扶余語で「善射者」の称であると解説してあります。先学の説では、善射者は「弓の名人」のことで、満州語で弓の名人を卓琳莽阿（チュリルムオル）と言ひ、卓と朱の音は近く、琳は齒舌の余韻であり、莽阿の二字は蒙に近いと言われています。

広開土王の碑文には鄒牟と記してあり、文武王の詔には中牟（チュム）と書いてありますからこれは朝鮮語であり、朱蒙はチュムルと読みますから満州語（濊語・扶余語）であります。

倭人伝には卓琳莽阿の音は伝わらず、善射者・弓の名人という意識が伝わり、卑弥弓呼という「類稀なる弓の達人」という名称が付けられたものと思われるのです。

『続日本紀』には、朱蒙・中牟とはせずに「都慕」とあります。韓国語で都はソウルのほかにスドウがあります。また、韓国語で思慕をサモハダと言います。ハダは接尾辞です。慕はモと発音しますので、都慕はスモと発音し、朱蒙に近い発音となるのです。

都を用いた語に、蘇伐都利・都市牛利・鞍作首都利とあります。韓国語で都利はソリと読むことが出来ますので、牛利の発音のソリと同音になります。ソリチダという語が韓国語にあります。意味は「わめく・大声を張り上げる・さげぶ」です。都市牛利とは「多くのものを一つに集めて統率する・大勢の人が物品の売買に集まる所・大声を張り上げる」といった感じの意味になるようです。

朱蒙は扶余国出身で、その都は「扶蘇岬（非西岬）阿斯達」とあります。扶蘇も非西も阿斯も「アス」と読んでいます。九州の中央部にある阿蘇山も「アスデ」と読むことが出来ますので、扶余語が語源と言えそうです。狗奴国はカラ国と発音し王国の意味だと先述しました。カラはカウラ・コウラ・コウリ・高句麗の変移です。久留米市に高良神社（大社）があります。ここが男王の率

いる狗奴国であります。

七 卑弥呼享年八十七歳

邪馬壹国の邪は、漢音で「シャ」であり、韓国語で「サ」と発音します。馬は中国語でも韓国語でも「マ」と発音しますので、邪馬とは「シャマ・サマ」と発音することになります。壹は韓国語で「ハン」と発音し「王」の意味でも用いられています。邪馬壹は、シャマハン・サマハンと発音しますので、吏読で「邪馬壹」と表現したものです。邪馬壹国とは「シャーマン王国」という意味です。韓国には韓国シャーマニズムの中心的職能者である巫堂（ムーダン）がいます。祭壇に鎮座していた神が、巫堂に憑依するというものです。卑弥呼はこのシャーマンなのです。

シャーマニズムの定義は様々ありますが、H・フィンダイゼンによりますと「精霊によって憑依される祭司的人物の言葉と行為を焦点とする現象」とあり「憑依状態はシベリア極北地帯の呪医に典型的にみられ、かかる人物がシャーマンと呼ばれる。この語は一般に種々の祭司の憑依にも適用され、その種々の表現がシャーマニズムとよばれる」（『シャーマニズム』佐々木宏幹著より）とあります。また、同書には「シャーマンの語はマンシュー・ツングース系諸族の呪術・宗教的職能者を指すサマンに由来する」とあります。卑弥呼が治める邪馬壹国はサマン王国という意味になるのです。

卑弥呼は「鬼道に事え、能く衆を惑わす」とあります。鬼道は韓国語で「クイト」と発音します。「クイ」は「貴」と同音です。貴の意味は「たっとい。うやまう。大きく目立った財貨」です。「ト」の祖語形はトツ（t o t）で「刀・銭・鉄・銅・石」などが同じ語彙になっていて、「ト」は「道・導・塗・銅・石」と同音なのです。これらことから、鬼道とは「尊い導き。尊い銅」と言っている事が分かるのです。「尊い銅」とは「銅鏡」の事に他なりません。

倭人伝の景初二年に「親魏倭王卑弥呼に制詔。・・・銅鏡百枚・・・悉く以つて汝が国中の人に示し、国家汝を哀れ知らしむ可。故に鄭重に汝に好物を賜うなり」とあるところの銅鏡の事なのです。

卑弥呼がこの銅鏡をどのように用いていたかを知る一文があります。『日本の神話』（高橋鐵著）によりますと「天の岩戸の神話で重要な役割を果たす鏡は「八咫の鏡」と呼ばれ、後に出てくる草薙の剣、八尺瓊の勾玉とともに、三種の神器の一つである。なぜ鏡が重要視されたのだろうか。小林行雄氏の考古学的推理によると、シベリアから中部、日本に至る各地にあったシャーマニズム（巫女が神がかりをして政治や農業上の占いをする信仰と儀式）には、榊の枝などに鏡をつるして太陽光線を反射させ、人びとの目をくらませた。そこからきて

いるらしく、アマテラスが巫女であったことの重要な証拠である。」とあります。三種の神器の一つである銅鏡は、卑弥呼から始まったことが分かるのです。

卑弥呼には「夫婿無く、男弟有り、佐けて国を治。」とあります。男弟は、隅田八幡宮所蔵の人物画像鏡銘文に「癸未年八月日十大王年男弟王」ともありません。男弟は「卑弥呼の男の弟」では無い事が分かるのです。十大は、韓国語の吏読でヨルダ (y o l d a) と発音し「ひらく・はじめる・あける・蓋をあける。道を拓く。関係を結ぶ」という意味なのです。王年の王は、韓国語で「ワング」と発音し「往」と同音なのです。意味は「行くこと・これから先」です。年は韓国語でヨン (y o n) と発音し、念と同音なのです。意味は「おもい、考え、気持ち、気を付けること、深く思うこと、深く望むこと」です。男弟の男は韓国語でナム (n a m) と発音します。この発音と同じ語に「他人、残る、余る、あとに留まる、後世に伝わる」と云うのがあります。弟は韓国語でチェ (t h e) と発音します。この発音と同じ語に「徐、提、制、祭」と云うのがあります。複数の組み合わせが出来ますが、祭の意味が「神霊を慰め祈願する・奉祀する・供え物や祭壇を清める儀式を行い、神霊をまつる」でありますから、男弟とは「あとに留まって奉祀する」という意味であることが分かるのです。

卑弥呼は「王と為りしより以来、見る有る者少なく・・・宮室・楼観・城柵・巖かに設け、常に人有り、兵を持して守衛する」という状況の中にいました。古訓では鬼のほかに隠と書いても「オニ」と発音し「こもる」と言う意味で捉えていたのです。寺社で信者がこもり祈念する堂を籠堂と言います。卑弥呼は籠堂・隠 (こもる・オニ) 堂・鬼堂で鬼道を行っていたこととなります。筑後川に宝満川が合流する所に「小森野」という地名があります。ここが邪馬壹国です。その南に狗奴国 (高良神社の周囲) があるのです。

卑弥呼について、景初二年頃に「年已に長大なるも」とあります。『三国史記倭人伝』(佐伯有清編訳)の『三国史記』新羅本紀には「倭の女王卑弥呼使いを遣わし来聘す。(阿達羅尼師今二十年〈西暦一七三〉五月条)」とあります。来聘とは「外国から外交使節が来朝して礼物を献ずること」です。礼物を献ずる原因として考えられる事が一つだけあります。『三国遺事』日本伝に「第八阿達羅王の即位四年(西暦一五七年)丁酉、東海の浜に延鳥郎と細鳥女の夫婦あり居り。一日、延鳥、海につきて藻を採りし。忽ち一巖ありし負いて日本におくる。国人、之を見て曰く。此れ非常の人なりと。乃ち立てて王と為す」とあります。これには続きがあり、三年後の西暦一六〇年に妻の細鳥女が来日して夫の延鳥郎を連れて帰ったのです。恐らくは、王となってからは巫女がその身の世話をし、やがて子供が出来たものと思われます。その子が一三歳の成人になった事の知らせと礼を云うために、西暦一七三年に使いを遣わしたものと思われるのです。

景初二年（西暦二二八年）は卑弥呼七八歳、正始四年は八十四歳、そして正始八年は八十七歳でした。

卑弥呼の死後「復立卑弥呼宗女壹与年十三為王、國中遂定」とあります。これは「卑弥呼の近くで仕事をしている巫女を、王の仲間に入れて宗女としたのでしょう。年も成年と認められる十三歳になったので、この宗女を立てて王と為す」と読むことが出来るのです。「壹与」とは「王族の仲間」という意味です。

八 ヤマトの語源は岩座の事です

『魏志』韓伝に「蘇塗国・臣蘇塗国」とあります。蘇塗はスド・スドウと発音します。意味は「森林神壇」です。韓国は、古代から宇宙の光明を崇拝の対象として、白頭山や太白山の樹林を「光明神の宿る所」と考えていました。本宮を「臣蘇塗」と言い、各地にある支宮を「蘇塗」と言います。臣蘇塗には一人の祭主が居ます。天神（ハヌニム）と言います。臣蘇塗とは天神が居ることから「大蘇塗」の意味となります。大蘇塗の天神は、各地の首領を呼び集めることが出来ます。これを「首都」と言います。都には「統べる」という意味があります。天神が神託を述べ、首領たちの話を聞くところを「朝廷」と言います。

日本では、蘇塗を神籬（ひもろぎ）と言います。樹木神壇のことです。信仰の対象は「巨石」や「大岩」にもあり、これを岩座・磐座（いわくら）と言います。これは「岩神壇」の事ですから、朝鮮半島からの渡来人たちは「岩塗」と考えたのです。岩座には祭主が一人だけ居ます。天皇です。天皇がおられる岩座を「臣岩座」と言います。「大岩座」の意味です。

岩は、中国語でガン（g a m）と発音します。韓国語ではアム（a m）と発音します。韓国語では、ア音はヤ行音に音韻変化しやすいのでヤム（y a m）という発音になります。韓国語では子音で終わりますが、日本語では母音が付きますのでヤマ（y a m a）となります。岩塗はヤマト（y a m a t o）と発音するのです。天皇がおられる岩塗は大ヤマト（大岩塗）です。この大ヤマトから天皇は各地の豪族の首領を呼び集めて神託をして、また、首領たちの話を聞いたりします。ここを「首都」と言います。話をする場所を「大ヤマト朝廷」と言うのです。

天皇の所在地をいつしか「大ヤマト」と呼ぶようになりましたが、韓国語と日本語の融和によって出来た言葉ですから、表現する漢字がなく、中国の史書では「大倭」の文字で表しています。これが「大和」の語源となったのです。

岩座は岩塗であり、岩塗はヤマトです。岩座と同じ意味の言葉に「岩限」があります。これは韓国語で「アムハン（a m h a n）」と発音します。ハンには「王・一・初」の意味がありますので、岩限は「岩一」と言っていることにも

なります。岩一を古訓で発音しますと「イハヒ」となり、漢字では「祝・齋」となります。

地名に「祝」が付くのは、大分県日田市夜明けに「祝原」とあります。また、宮崎県高千穂町上野にも「祝原」とあります。奈良県明日香村には「祝戸」とあります。祝は「岩一」ですから「岩限塗」の事となります。意味は「神の鎮座する施設・区域の神壇」です。

岩座は「岩神壇」ですから「岩塗」となり、塗と同じ発音の「戸」を用いて「岩戸」と表現することが出来るのです。この語は「天の岩戸」と表現して使われています・これらの語は「韓国語と日本語との融和による発音を吏読で表現している」と言えるのです。

九 方位は二つの基準点、距離は吏読です

方位を知るには基準点が必要です。『隋書』倭国伝では、文林郎裴清が倭に遣わされた時の行程に「度百濟、行至竹島、南望耽羅国」とあります。「竹島に至る」とありますので竹島に「行きついた。到着した。」事になります。韓国語で「竹」はテ (t e) と発音します。韓国語でテーハダという語があります。意味は「向かい合う、対面する」です (ハダは接尾辞) から、この竹島から「南の方向に耽羅国を遠くからながめやる。向かい合うことが出来る」と記録してあるのです。帝が遣わす船団ですから大きな島だと思われれます。耽羅国 (済州島) の北側にある大きな島とは「珍島」の事です。この珍島を基準点として「南に耽羅国を望む」と記録してあるのです。

行程はさらに「経都斯麻国、迺在大海中。又東至一支国、又至竹斯国、又東至秦王国」とあります。ここで言う「はるか大海の中に在る」という大海は、冒頭の「倭国在百濟・新羅東南、水陸三千里、於大海之中」の大海です。『魏志』倭人伝では「倭人在帶方東南大海之中、依山島為国邑」とあります。朝鮮半島の西海岸を南下して竹島 (珍島) に着いたのです。『魏志』で云うところの「乍南乍東」の「乍南」の部分です。北緯 38 度と東経 126 度の交点を第一基準点としますと、竹島は四百 km、耽羅国までは五百 km の距離となります。

「帯方の東南の大海」に行くには東行する必要があります。竹島を第二基準点とします。竹島から東に航行したら都斯麻国と一支国を確認できたので、ここが「大海之中」であることを知ったのです。都斯麻国を先に訪問しました。竹島は凡そ北緯 34 度 50 分で、都斯麻国の巖原と同緯度です。耽羅国は凡そ北緯 33 度 50 分で、平戸島・唐津と同緯度です。巖原から北の釜山 (狗邪韓国) までの距離は約百 km で、巖原から南の唐津 (末羅国) までの距離も約百 km です。竹島から南の耽羅国までの距離は約百 km ですから、平行四辺形が形

成されます。厳原と珍島を線で結び基準線とします。唐津と珍島を線で結ぶと、その角は約15度です。同様に釜山から珍島を線で結ぶと、同じくその角は約15度ですので、合わせて30度です。この角度ですから、珍島から見て釜山も厳原も壱岐も唐津も東の方向と判断して「又東至一支国」と一か所だけに方位を記録したのです。細かく言えば、基準線に対して珍島から東北東15度の方向に約300kmで釜山、同様に珍島から真東に300kmで厳原、また珍島から東南東約7.5度の方角に約300kmで壱岐、さらに珍島から東南東15度の方角に約300kmで唐津・平戸付近と言う意味なのです。

釜山から唐津まで約200kmですから二千余里なのですが、『魏志』では三千余里となっています。釜山から南方に300kmでは天草島付近の距離となります。「自郡至女王国萬二千余里」ですから、この天草から更に200km南に行く事になりますと口永良部島付近となります。北緯約31度ですから、北緯線に沿って西に行くと上海付近となります。続いて「男子無大小、皆黥面文身……夏后少康之子、封於会稽、断髮文身、以避蛟龍之害、今倭水人、好沈没捕魚蛤」とあります。これは江南の風俗の情報です。『魏志』編纂者の陳寿は、末羅国の風俗が「好捕魚鱖、水無深淺、皆沈没取之」である事を、伊都国を訪ねた郡使が残した情報を知っていたのです。これが江南地域の風俗と極似していたため、邪馬壹国の距離を「萬二千余里」としたのです。

陳寿とほぼ同時代に活躍した地図学者の裴秀が、「禹貢地域図十八編」と、十里を一分、百里を一寸に縮尺した一丈四方の「地形方丈図」を作っているのです。陳寿はこの地図を見ながら「計其道里、當在会稽東冶之東……所有無與儋耳・朱崖同」と記録したのです。

地図は近代まで国家機密でした。陳寿は『魏志』での方位を二か所使っています。第一基準点は一大国です。一大国から北に「到其北岸狗邪韓国七千余里」として、狗邪韓国から南に一大国が在ると南北線を示しているのです。対馬国には「乗船南北市糴」として、北に狗邪韓国が在ることを確認して「又南渡……至一大国」として、この三か国は南北線上に存在することを示しています。同様に一大国も「亦南北市糴。」とありますので、「又渡……至末羅国」は、基準点の一大国から南の方位に末羅国が在ると言っているのです。同様に基準点の一大国から「東南」の方向に「到伊都国」が在り、一大国から「南至邪馬壹国」と基準点を一大国に置いている事が分かるのです。伊都国と邪馬壹国は、一大国から末羅国まで船で航行した後は徒歩となります。第二基準点は伊都国です。伊都国の東の方角に不弥国が在り、東南の方角に奴国が在ると記録してあるのです。

陳寿は北緯38度線から南の竹島（珍島）までの400kmを「乍南」として四千里とし、竹島から狗邪韓国（釜山）までの300kmを「乍東」として三千里と

計算しています。100km が千里ですから、一里は 100m となります。一里は 300 歩ですから一歩は 33cm です。一歩は六尺ですから一尺は 5.5cm となります。

周代の一尺は大尺で 22.5cm ですから、陳寿の一尺は四分の一の数値となります。周代の六尺（一歩）は 1.35m ですから、300 歩（一里）で 405m となり、二百五十里で 100km、千里で 405km となるのです。「乍南」の四千里は 405km ですから「千余里」とすべきだったのです。同様に「乍東」の三千里も 300km の「七百五十里」として、釜山（狗邪韓国）から巖原（対馬国）の一千里も 100km の「二百五十里」、巖原と壱岐（一大国）・壱岐から唐津（末羅国）の間も、50km の「百二十五里」と記録すべきだったのです。陳寿が正確な情報を記録しなかったのは、地図が国家機密だったからです。そのことを陳寿は「自郡至女王国萬二千余里」と記しています。「萬」は韓国語でも「マン」です。「二」は韓国語で「トゥル」と発音します。韓国の語に「マントウルダ」とあり（ダは接尾辞）、意味は「作る、こしらえる、創造、創作する、組織する、制定する、引き起こす、企む、準備する、用意する」なのです。国家機密ですから、距離の情報は公開されずに、担当組織による創造・企みの暗号で「萬二千余里」という吏読字で表現したものであろうと思えるのです。「計其道里、當在会稽東冶之東」を緯度で計ると屋久島・口永良部島付近となりますので、「所有無與儋耳・朱崖同」とか「夏后少康之子、封於会稽、斷髮文身、以避蛟龍之害」と江南の雰囲気を表現して、その直後に「今倭水人」と記して、「倭」はこの様な地域に在るのだと「担当組織」による「企み」を示しているのです。